

令和元年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」

& 「愛顔の写真」

愛媛県



想いを、つなぐ。地域を、つなぐ。

心に留まる、伊予銀行のコラムサイト



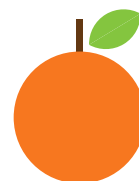
iyomemo



column

お金のことだけじゃない!?

観光や地域のはなし、配信中♪



伊予銀行



水樹奈々

女子
大心
自由
元気

 愛媛銀行

愛顔^{えがお}とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔^{えがお}あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

今回で6回目を迎える本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」^{えがお}を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているものです。今年度は、エピソード部門に、46都道府県と三つの国から過去最多の4,526作品、写真部門についても、46都道府県から4,590作品もの応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

受賞作品の選考に当たっては、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さんを審査委員長とし、エピソード部門では、若手俳人のトップランナーとして活躍中の神野紗希さん、毎年ゲストとして表彰式イベントに出演されている女優の紺野美沙子さん、そして私が最終審査を行い、写真部門については、本県出身の世界的写真家

である白川義員さんにも御協力をいただきました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとうございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」にあふれるすばらしい力作ぞろいで、選考に大変苦労いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、愛情をもって人に接することの大切さを気付かせてくれた恩師との思い出、気恥ずかしさから母親への思いを素直に表現できない男子高校生の胸の内があがれた心温まるものがたりです。

今回の受賞作をまとめた本作品集を多くの方々が見覧になり、全国各地に大きな「愛顔」の輪が広がっていきまことを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」	あたたかい涙	田後 寛子 (東京都)	8
「特別賞」	「思いやる気」	野本 浩愼 (愛媛県)	10
「優秀賞」	にらめっこ	小松崎 有美 (埼玉県)	12
	笑顔の帽子	感王寺美智子 (福岡県)	14
	気持ちのお返し	稲井 偉公子 (兵庫県)	16
	えくぼ	小島 朋子 (大阪府)	18
「入選」	座敷わらし	小林 浩子 (東京都)	20
	わすれな草をあなたに	森生 ゆり子 (東京都)	22
	病院の待合室	山田 幸夫 (大阪府)	24
	見返り息子	溝口 元太 (東京都)	26
	品質保証書	大西 賢 (東京都)	28
「佳作」	公園のアイスクリーム	丸茂 一文 (山梨県)	29
	88回目の謝罪	柘植 律志 (石川県)	30
	あの日言えなかった「ありがとう」	馬場 真由美 (大阪府)	31
	空から届いたエール	菅 花穂 (愛媛県)	32
	押入れの中のうさぎ	松坂 敬子 (神奈川県)	33
	一本のかさ	山口 舞 (滋賀県)	34
	リスタート	秋田 真奈美 (兵庫県)	35
	三か月に一度	中村 実千代 (栃木県)	36
	感動の還暦バースデー	中静 憲夫 (新潟県)	37

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

- 「知事賞」 笑顔の和音
- 「白川義員特別賞」 相棒
- 「河原学園賞」 喜色満面

松下	莉子（愛媛県）	高校生	58
國保	美帆（神奈川県）	高校生	58
和田	奈々（愛媛県）	高校生	58

『一般の部』

- 「愛媛広告協会賞」 小春日和
- 「愛媛県商工会議所連合会賞」 認知なのに
- 『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

- 「愛媛県獣医師会賞」 温かいんだから
- 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」 おいしいー
- 「愛媛県歯科医師会賞」 ハッピースカイ
- 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」 仲間との絆
- 「愛媛県IT推進協会賞」 にぱっ！な笑顔
- 「愛媛経済同友会賞」 麦わらおじさん

尾崎	あかね（愛媛県）	………	59
三谷	真美（愛知県）	………	59
内藤	七摘（愛媛県）	高校生	59
栗坂	侑愛（愛媛県）	小学生	59
岩城	咲羽（愛媛県）	高校生	60
小島	友梨香（神奈川県）	高校生	60
佐伯	朱音（愛媛県）	高校生	60
渡辺	椎菜（東京都）	高校生	60

「エピソード部門」一般の部

あたたかい涙

田後 寛子（東京都）

白い洗面器に手を入れた途端、手の甲から赤い小さなつぶが現われて、やがて細い何本かの筋となって浮き上がってきました。

さつき薪割をしたときに、ぴり／＼とひび割れたところから滲み出てきたのです。その両手がいとおしく、そっとエプロンで包みました。

私はこの春、働き乍ら定時制高校へ通うことを決心して、この家でお手伝いさんとなったのです。大きなお屋敷では思っていたより、厳しく、時に心が折れそうになりました。

終戦の時、私は九才でした。中国から引揚げてきた霧島の山の麓、開拓地の暮しは、いつまでも貧しく、食べ物も充分ではありません。

「そんなに勉強したいのなら」と許してもらった両親にも申し訳なく帰ることすら出来ませんでした。

その夜は仕事を終えて戻る足も重く、黒光りした階段の灯もぼんやり

としていました。

襖ふすまをあけた途端、ふわっと甘い香、あわてて灯をつけました、なんと机の上にケーキ!! 白いクリームの上に缶づめの大きなさくらんぼ、そのまわりにミカンが並んでいました。下宿されていた先生からの「頑張っているご褒美です」と手紙が添えてありました。

あ、見あてて下さったのだ、さっき迄の、沈んだ気持はふっ飛び嬉しくなりやがてあったかい涙あふが溢れてきました。

私は先生のようなやさしい気持をもっているだろうか？ 自分の事しか考えられない生き方をしていないか？ 自分自身に問いました。

それからの私は御飯を炊き乍ら灰の中に、小枝で字を書き、盥たらいの中の泡でガラスに図を書き、風呂に水を汲み上げ乍ら単語をおぼえ、

仕事は言われる前にやる、知ってるかぎり友達に教える、どんな人にも何の仕事をしている人にもやさしく決して卑下しない。

「先生ありがとうございます、私、今日も愛顔えがおで患者さん一人ひとりひとりと向き合って、一日も早い回復のお手伝いをしています。」

「特別賞」

「思いやる気」

野本 浩慎（愛媛県）

『先生、お元気ですか？私は現在、人の人生を応援する仕事をしています。あなたの座右の銘「思いやる気」を胸に抱きながら』

私は小学五年生から中学生にかけて学校を休みがちだった。どこかクラスに馴染めず、先生や同級生と関わる事が不安で苦しくなった。当時は不登校に対する認識も厳しく、怠けや甘えと捉える人もいて、自己嫌悪に陥り、両親にも心配をかけた。

そんななかで当時、唯一、夢中になれるものがプロ野球観戦だった。あるシーズンに愛媛出身のプロ野球選手が活躍していて、僕は中学二年生の十二月に思いきってファンレターを送った。

後日、ポストに一通の手紙が入っており、名字が見えた。「おおっ」一瞬、興奮した。ただ、よく見ると名まえが違う。学校の先生からだっただ。クラス担任ではなかったが、スポーツマンで爽やかな先生という印

象を持っていた。手紙は「僕とキャッチボールをしませんか？」という内容だった。マジか。ファンレターを送った選手と同じ名字であることに僕は何か不思議な縁を感じた。

「ナイスボール！」時々、ミットに乾いた音が鳴り響き、先生が笑顔で応えてくれる。「あれ？なんか楽しいぞ」先生は仕事が終わるとほぼ毎日、自宅に来て近所の公園でキャッチボールをしてくれた。僕が野球好きなのを知ってくれていたのだ。

中学三年生になり、僕は学校を休まず通うようになっていた。いつの間にか僕の心の中にやる気が生まれていた。振り返ると、頑張っている姿を先生に見てほしかったのかもしれない。そして僕は無事に卒業し、先生は年度末に異動となった。先生とのキャッチボールは一年四カ月に及んだ。

『先生、私を救ってくれてありがとう。思いやりとやる気を合わせた「思いやる気」はしっかりと私の心に引き継がれています。またいつか、キャッチボールしましょう！』

「優秀賞」

にらめっこ

小松崎 有美（埼玉県）

短気でお茶目な夫。そんな夫を持つ私もまた頑固で譲らない性格。私達はいつだつてつまらないことに腹を立てた。だけど私達には結婚当初から決めたルールがあつた。それは「言いたいことを言つて引き分けにする」だつた。どんなに相手が悪くても引き分けだ。少々腑に落ちないが仕方ない。喧嘩両成敗というように、怒る方も怒らせる方も悪いのだ。しかし、あるとき夫が「にらめっこで決着をつけよう」と言い出した。私はジャンケンにしようと言つたがそこは折れた。こうして夫婦のにらめっこ対決が始まつた。「にらめっこしましょ、あつぷつぷ」するとうだ。さつきまで鬼のようにつり上がった目をしていた夫が、まるでおかめのように目を垂れ下げた。そのギャップに腸が煮えくり返つていた私も、今度は腹の底から笑つてしまった。もちろん笑つた方が負け。それからも事あるごとににらめっこをした。だいたい負けるのは私だつた。

でも負けたのになぜか悔しくなかった。

そんな夫が昨年末、胃癌で帰らぬ人となった。まだ子どもは三歳だというのに。とても笑ってはいられず、だからといって泣いてもいられなかった。これからは女手ひとつで息子を育てる。そんなプレッシャーから息子に対し怒ってばかりいた。おかたづけは？はみがきは？ああ、また怒っちゃった。気づけば笑うことを忘れ、夜になると天使のような寝顔に詫びた。そんな息子が幼稚園でいらめっこを覚えてきた。やろう、やろうとエプロンを引っ張った。

「いらめっこしましょ、あっぷっぷ」

するとどうだ。なんと目を垂れ下げるではないか。まさに夫の愛を受け継いだ愛顔だった。懐かしい記憶がよみがえり、なんだか泣けてきた。こんなに泣いたいらめっこは初めて。だけどこんなに笑ったいらめっこも初めてだった。

今も私の連敗記録は更新中である。

「優秀賞」

笑顔の帽子

感王寺 美智子（福岡県）

乳癌になり、抗がん剤治療で髪が抜けた。

覚悟はしていたが、自慢の長い睫毛まで、なくなってしまう時は、シヨックだった。

涙の粒が、コロコロと玉のまま、頬を転がり落ち、鏡を見ることを止めた。

ある通院日のこと。

いつものように俯きがちに、化学療法室に入ると、看護師さんが、声を上げた。

「わあ、感王寺さん、今日は猫耳ついてる！」

看護師さんや患者さんの視線が集まる。

「かわいい！感王寺さんの帽子、いつもユニークで楽しくて、ほっこりするわ」「そうそう、今日はどんな帽子かしらって、今も噂してたの」

治療を受けている皆さんが、ニコニコと、私を見ている。でも、私は。

自分が今日、どんな帽子を被って来たのか、解らなかつた。

編み物上手な友人が、私を励まそうと、帽子を、いくつも編んでくれていた。けれど私は、その心のこもった帽子を、よく見もせず、いつもただ、髪がなくなった頭を、隠す為だけに被っていたのだ。

家に帰り、鏡を見た。頭の上に、ピンと立った猫耳が生えた、自分が映っている。思わず、プツと吹き出した。年甲斐もないが、けっこう、可愛いじゃないか。

気がつくと、鏡の中の私が笑っていた。

久しぶりに見た自分の笑顔だった。

そうだ。自分を醜くしているのは、病じゃない、鏡には映らない、今の私の心が醜くしていたのだ。

次の加療日、私は友人が編んだ帽子の中から、ドレッドヘアを真似た帽子を選んだ。

バッチリ、メイクをした。つけ睫毛も、たっぷり盛った。レゲエのリズムを真似て、ちよつと左右に揺れてみた。よし、悪くない。

療法室へ入ると、歓声があがった。

ちよつとしたアイドル気分になった。

「優秀賞」

気持ちのお返し

稲井 偉公子（兵庫県）

長女の幼稚園生活は、凄まじい登園拒否からのスタートだった。

近所の子ども達十数人を、当番の保護者が三名で送迎する集団登園。私が当番でない時の長女の騒ぎ様は猛烈で、まるで一本釣りされた鰹のごとく、地面に寝そべりバタバタと暴れる。その鰹と化した娘を、どの当番のお母さんも、毎朝笑顔でヒョイと抱きかかえて連れて行ってくれた。

申し訳なく、毎日当番をしたいと言う私を、「ルールやで、泣いたら思い通りになること教えてどうするん。お母さんも我慢や。」先輩ママが叱ってくれた。

（今日もカバンをおろさず、ずっとお部屋の入口に立っていました。「カバンをロッカーにしまったら、ここにいないといけなくなるでしょ！」と言って。芯が強いですね。頑張れ！）

先生からのノート。娘、そして私も励ましてくださっている。しかし、娘の頑固さに呆れるやら情けないやら。

私が困った顔見せたらアカン。ドンと構えとかな。そう思っただけで毎朝平気な顔をして送り出す。でもある日、鯉娘が見えなくなると、我慢できずに泣いてしまった。

「なんで普通にしてくれへんのかな。なんでうちの子だけ……。ホンマに毎日すみません。」

そんな私に先輩ママがかけてくれた言葉。

「毎日辛いやる、泣いたらええねんで。ほんで、申し訳ないなんて思いなや。うちはお兄ちゃんが凄かったな。そんな時先輩ママに言われてん、『次に泣くお母さんおったら、助けたり』って。だから、私らじゃなくて、次のお母さんに気持ち返して行って。助けたって。」

鯉娘は社会人になり、人生の荒波に持ち前の芯の強さと頑固さで立ち向かっている。

私は先輩ママの言葉を宝に、子育て支援員となった。そして、たくさんのお母さんにお返しするべく、日々精進の真っ最中である。

「入選」

えくぼ

小島 朋子（大阪府）

微笑みはえくぼからきた言葉だと聞いたことがある。そのえくぼが印象的な温かい人に出会ったのは、もう五十年も前のことだ。

就職が決まり半年ほどの研修を終え、いよいよ赴任地が言い渡されるという日だった。人事課長のY氏は紋切り型に赴任先を告げた後、穏やかな笑みをこぼした。色黒で将棋盤のような顔には意外にもえくぼがあった。

「人との信頼関係を特に必要とする仕事なので、あえてひとこと言わせて下さい」と前置きした後、諭すように私に語りかけた。

「あなたはとても優しく笑顔の素敵な人です。でも周りに気を遣い過ぎているような気がします。あなたの場合はもう少し素直な自分を出した方がいいと思いますよ」

涙がぷっくりと膨れ上がって下を向いた。

生まれ育った家庭は人間関係が難しかった。争うことが嫌で誰からもいい子だと言われたくて、全ての感情は笑顔の奥に閉じ込めてきた。「自己主張しなさい」と生まれて初めて言われた。涙は止まらなかった。

若い娘の突然の涙に狼狽したのか、Y課長は慌てて取ってつけたような話を始めた。

「五歳の子どもがいるんだけど、仕事が忙しくてね。たまに帰ると『また来てね』と言われてしまう。お隣さんが変に思うよね」

泣き笑いの顔を上げた。愛嬌のあるえくぼが「うんうん」と頷いていた。相手のためであっても言うべきことを言うのは勇気が要った。傷つき傷つけることが怖くて習い性の楽な道を選びそうになった時は、あの日のえくぼに背中を押してもらった。

今夫からは「言いたい放題の人やな」と言われている。「お互いさまでしょう」と私も返す。苦笑いする夫の口元には深いしわが現れる。「フツツ」と微笑むと夫が「エッ？」というように首を傾げる。しわがえくぼに見えたのだ。テニス焼けした面積の大きな顔が五十年前の将棋盤に重なった。もうひとり、えくぼを持った温かい人が今私の前にいる。

座敷わらし

小林 浩子（東京都）

秋田の叔母が脳梗塞で倒れた。幸い発見も早く、病院への搬送もスピーディに対応された上に、すぐに適切な手術を受けられたため良好だった。だが、術後のリハビリが思ったよりも上手くいかず、二週間後には下半身の麻痺が徐々に見られて物忘れも増えていった。

今から十五年ほど前、叔母宅で大勢の親戚が集まり新年を迎えたことがあった。大晦日の秋田は一面に雪がうんと降り積もっていた。東京では決して見られない幻想的な風景に思わず心が弾んだ。紅白歌合戦が終盤に近づいた頃にトイレに入ったとき、棚にうつすら埃が積もっているのに気づいた。夫婦二人だけで暮らす田舎の大掃除はさぞ大変なことだろう。ましてや、年末にこうして大勢がつめかけたこともあり、トイレまでは掃除が行き届かなかったと見える。そこで、叔母にせめてもの感謝の意を伝えたいと、トイレ掃除を一人せつせと始めた。一年の汚れま

でが洗われるようで気持ちが良かった。

翌朝、新年を迎えると、叔母の高らかな声がした。「あんれえ、トイレがピカピカだあ」

さすが家の主だけあり、すぐに変化に気づいた。そして、「こりゃ正月から、座敷わらしでも来たんでねえがあ」と真面目な顔をして皆に伝えた。ドツと笑い声が響き渡る。親戚たちも座敷わらしが来たとすつかりと信じ込んでいる。東北地方には今でも古い言い伝えがあるそうだ。座敷わらしと呼ばれる子どもが遊びに訪れた家は福が来たと考えられ、後々に栄えていくと。今さら言い出せなかった。まさか、昨夜にトイレ掃除をしたなんて。でも、みんなが笑顔で新年を迎えられたことにこそ福が宿る。私は秘かに幸せだった。

今月から、叔母はリハビリ専門の病院に移る。回復を願うばかりだ。彼女の容態が落ち着いたら、座敷わらしの正体を伝えてみたい。

さてさて、懐かしい一コマを思い出して、再び共に笑い合える日が来るだろうか。叔母よ、どうか元気になってほしい。

「入選」

わすれな草をあなたに

森生 ゆり子（東京都）

結婚して夫の家に入り、だいたい二十年経った。結婚したばかりの頃、私はよく泣いていた。姑は意地の悪い人ではなかったけれど、はつきり言われると傷つくこともあるのだ。お互い若い頃は血気盛んで、時々は大喧嘩をした。

そんな姑も認知症がひどくなり、老人介護施設のお世話になることになった。家がいいと駄々をこねていたのもつかの間、ここが何処なのか、自分が誰なのかもわからない日が増えてきた。家で介護できない負い目もあり、私はせつせと施設に通った。

「お義母さん、今日は顔色がいいのね」

「おかげ様でね」

近くを通った介護職員から、

「あら、お見舞い良かったですね」

と、声をかけられると、

「私の妹なの」

嬉しそうに答える。今日の私は姑の妹になってしまったらしい。友達だっ

たり幼馴染だったり、色々な役がまわってくるが、いい役ばかりでほつとしていた。

車いすを押し、いつものように中庭を散歩した。園芸好きな姑は、あれは金魚草、これはキンセンカなどと教えてくれる。そんな姑は本当に穏やかで、こうして仲良く話しているのが嘘のようだ。ふと見ると、わすれな草が群生している。これは私でも名前がわかる。

「ほら、お義母さん、わすれな草」

屈んで摘んだ小さな花の束を、姑の手に持たせる。姑は私の顔をじつと見て言った。

「あなた、息子のお嫁さんに似ているわ。あの子は本当にいい子なの」
私は耳を疑った。いつも憎たらしい事ばかり言っていた姑から、こんな言葉がもれるなんて。

「いつも優しくしてくれて、私は幸せでした」

かき消えそうな姑の小さな声に、私は胸がいっぱいになった。

「お義母さん」

わすれな草を持った姑の手に、自分の手を重ね、私は思わず泣いてしまった。

その一週間後、姑は天国へと旅立っていった。私は、豪華な花に埋もれた姑の顔の近くに、わすれな草をそっと飾った。その花言葉を思い出しながら。

「入選」

病院の待合室

山田 幸夫（大阪府）

私が仕事を終えて帰宅するなり、妻が、玄関先へ駆けてきた。その顔色は変わっている。

「今から、車で病院へ行つて！」

二歳の息子が高熱を出したらしい。

インフルエンザが流行していた時期だった。待合室には、それらしいぐったりした様子の子どもたちと、心配そうな暗い顔の母親たちで溢れていた。

順番が来て、診察室に入ると、医師は、息子に優しく話しかけながら、診察をした。

「風邪ですね。注射をしましょう」と言い、腕に消毒綿を当てると、息子は、拒否した。

「おてては、いたくないのに、おててに ちゅうしゃ しないで！」

必死に叫ぶ言い方が可笑しく、どっと笑った。その場にいた私と妻、医師、看護師はもちろん、扉一枚で隔てられた待合室からも笑っている

声が聞こえた。

ひとしきり笑った後、息子の腕を持ち、医師が注射をした。終わって、必死にこらえていた息子に、看護師が言う。

「ボク、泣かないで、えらかったわね」

ほめられた息子は、大きな声で、

「泣いたら、あとで、お母さんに、おこられるもん」

それは、真実味のこもった声だった。

診察室は、再び爆笑に包まれた。待合室にも届いたようで、笑っているのが聞こえる。

診察室を出ると、みんなの視線が、息子や親の私たちに向けられ、愛おしそうな笑顔で様々に声をかけた。

「ボク、お母さんにおこられなくてよかったね」「えらかったね」……「お大事に！」

明るい声に押されて、私たちは病院をでた。

病院では、患っている人へのお互いの配慮だろうか、暗い神妙な顔になってしまう。でも、この出来事をきっかけに、笑顔や笑い声は、病院にこそ必要ではないのかと思った。

病院の待合室に笑顔を満たした息子を、私はあの日からしばらくの間、叱れなかった。

見返り息子

溝口 元太（東京都）

中学生の僕は、思春期の権化だった。同居していることが奇跡だと思えるほど、家族の存在が嫌だった。特に母は嫌いだった。やったこともなくせに僕のハンドボールの試合を見て意見する。分かっていることをいちいち言ってくる。ノックもせずに勝手に僕の部屋に入ってくる。そんな母を一体何度「クソババア」と罵ったのだろう。

しかし、そんな母に対しても感謝の気持ちはあった。母は、何があるうと毎日朝早く起きて弁当を作り、僕を玄関まで「いってらっしゃい」と見送ってくれていたからだ。鋭く尖った角をブンブン振り回していた僕も、これにはその角を引っ込めなければならなかった。とはいえ、僕の口から感謝どころか「いってきます」の言葉すら出てくることはなかった。思春期とはそういう時期のことだ。

高校に上がり起床時間が一時間早くなっても、母はそれまでと変わら

ず毎朝弁当を作り、僕を見送った。依然として僕は思春期にあったが、尖っていた角は丸みを帯び始めていた。卒業が近づくにつれ、見送る母を無視して家を出ることに後ろめたさを感じ始めたのだ。そうはいっても直接感謝を言葉にするのは恥ずかしい。そこで僕は、母の「いってらっしゃい」に「いってきます」と応えてみようと思った。これならば呼びかけに対する返答なので、ありがたいよりも簡単に言えそうだ。

ある日の早朝、母はいつも通り弁当を作り、僕が玄関でぎこちなく靴を履き終わると「いってらっしゃい」と言った。ここで僕は計画通り「いってきます」と言おうと後ろを振り返った。いってきますを言うどころか振り返ったことすらないやと思いつつ、僕は母の顔をそっと見た。母は柔らかな微笑んでいた。いつもこんな顔で僕を送り出しているのだろうか。僕はとたんに恥ずかしくなり何も言えなくなった。そしてできるだけ表情を崩さずドアの方に向き直り、普段を装って家を出た。僕は結局振り返ることしかできなかった。

「佳作」

品質保証書

大西 賢（東京都）

恋人と付き合って数年が経った頃、

「なんで結婚しないの？」

と職場でよく聞かれるようになってきた。私としては早く結婚したいのだが、当時の私は非正規のフリーターだった。とてもじゃないが、結婚を申し込める立場ではない。

「アルバイト生活じゃ無理ですよ」

結婚を勧める同僚たちにそう説明するのは、とても気の滅入ることだった。

ある日、仕事が一段落して休憩しようと思い、社員食堂に行くとき、みんなが輪になって何かをしている。何をしているんだらうとのぞき込もうとすると、

「はい！ できたよ！ これ、彼女さんに渡して！」

と一通の封筒を渡された。封筒には、

〈彼女さんへ 正社員一同より〉

と書かれていた。

週末に恋人に会い、その封筒を渡した。そして、一緒になって開封した。そこには、こんなことが書いてあった。

〈品質保証書

彼はアルバイトですが、決して不真面目でもない加減でもありません。勤勉で誠実な男です。収入は不安定かもしませんが、結婚したら、きっといい旦那さんになると思います。ここに、それを証明します。

正社員一同〉

——びっくりした。休憩時間に、正社員の人たちがこんなものを作っていたことを知って、驚きと同時に、嬉しさも感じた。

「へえ、こんなものを作ってもらえるなんて、よっぽど信頼されてるんだね」

彼女はニッコリ笑って、私に握手を求めてきた。

結婚を後押ししてくれたあの「品質保証書」。夫婦の宝物として、今も大切に保管してある。

「佳作」

公園のアイスクリーム

丸茂 一文（山梨県）

朝食前、幼稚園の年少で、4歳になった双子のまほ君とみずき君に二人の母親が

「おいしいちゃんと散歩に行つて来なさい」と言い、二人が近くの公園を案内してくれるとので、三人で出かけた。大きな池のある、静かな公園、朝の空気もすがすがしく、二人は遊具で遊んだり、サイクリングロードを走ったり、活発に動き回っていた。しかし二人はアイスクリームの自動販売機の前にくると、急に動かなくなった。そして販売機の画面を見ながら、うらめしそうにしていた。私が何か言い出すのを待っているようだった。私は二人の表情につられ、

「アイスクリームが食べたいのか」と言ってしまった。二人は「食べたい、食べたい」とせがむ。私が「ママが朝ご飯の前だから、食べてはいけないと言うよ」と言うと二人は揃って

「ママには黙っていればわからないよ」と言う。彼らからそんな、大人びた言葉が出るとは思わなかったので当惑

したのだが、感心してしまった。そのため私は

「じゃあ、約束だよ」と言ってしまった。アイスクリームを一つ買って、二人で半分にして食べたのである。二人は散歩から帰っても、アイスクリームの話はせずに、何食わぬ顔で朝ご飯を食べていた。その表情には約束を守るという固い意志が感じられた。

次の朝、私は孫たちと別れて、帰るときになった。そのとき母親は

「お父さん、アイスクリームのことを二人から聞いたよ。二人を叱っておいたからね」とにこにこしながら言う。私はしまったと思った。母親の隣にいる二人は約束を守れなくてすまないという、神妙な表情だった。二人が昨夜、公園のアイスクリームの話を両親に楽しそうにしている様子が浮かんでくると、かわいらしく思わず笑ってしまった。すると二人の孫の表情もホッとしたような、子どもらしい可愛い笑顔に変わった。

「佳作」

88回目の謝罪

柘植 律志（石川県）

孫の笑顔は、私を笑顔にする。横にいる妻もそれを見て笑っている。

長女は出来ちゃった結婚である。今は授かり婚と言うらしい。相手の彼は生活力もあり、何より娘を大事に考えてくれているので許したが、わだかまりは消えていない。

里帰り出産で、長女だけ家に帰ってきた。出産準備は、昨年定年して時間のある私が、すべてのパシリを引き受けた。陣痛が来て、娘を病院に運び数時間腰をさすった。無事孫が生まれた時は、嬉しいというより心底ホッとした。

私自身は、長女が生まれた時は立ち会っていない。外せない夜の接待を優先し、終わってから駆けつけた為、酒臭い娘との初対面になった。このことで二十年以上、妻から事あるごとにチクチクと嫌味を言われ、数えると87回もの謝罪をしている。

「出産でこんなに大変だったのか！。あの時はすまん。君は一人で頑張ったんだもんな」

孫が生まれた直後の88回目の謝罪に、妻は驚いたように

私を見て、ひと呼吸おき

「今のは心からの謝罪だね。まあ二十年以上かかったけど許してやるか！」

ニヤリと少し意地悪そうな笑顔をみせた。

娘の旦那は、400キロ以上離れた仕事先から、汗だくで作業着のままとんできて、ギリギリ出産には間に合った。

翌日病院にいくと、孫はまだ目は見えてないはずなのに、顔をクシャッととして笑った。その笑顔があまりに可愛く、私も笑顔になった。娘の旦那は（ぼくを見て笑ってくれた）と泣きだした。いつもはクールな奴が、号泣だ。横にいた妻もそれを優しく笑っている。（君が生まれてきたことが、君の笑顔が、いろいろなわだかまりを、雪解け水のように洗い流していく。君のお父さん、結構いいやつかも！）

私の心の声を感じたのか、孫がクシャクシャつとまた笑った。

「佳作」

あの日言えなかった「ありがとう」

馬場 真由美（大阪府）

「あつ……、この冊子……。」

二年ぶりに帰省した実家で、懐かしいものを見つけた。私が中学三年生のときに参加した、吹奏楽コンクール鹿児島県大会のパンフレットだ。いつもは開けない母の箆笥を開けた際、下のほうから出てきたのだ。私はとっくに捨ててしまっていたのに、母はずっと取ってくれていたのか。冊子を手取る。私は十六年前の記憶に思いを馳せる。

中学時代、私は吹奏楽部に所属していて、クラリネットを担当していた。もう三年生、毎年夏に開催される県大会に参加できるのも、今年が最後だ。私たちは離島に住んでいるので、県大会が行われる鹿児島市へは前泊して参加する。保護者の多くは県大会を見に来ることができない。その為、鹿児島市への出発前日の壮行会で、保護者呼んで演奏曲を披露する。その年いつもとひとつ違ったのは、自由曲に私のソロがあったことだ。壮行会では我ながら良く吹けた。その日の夜、母が言ってくれた。「すごく良かったよ。真由美のソロ、本番で聴けたらもっと良かったな。」

県大会に参加し、私たちは無事演奏を終えた。私はとても緊張してしまい、壮行会ほどには良い演奏ができなかった。落ち込む私を友達が励ましてくれるとき、彼女が近くを指差して言った。「あれ、真由美ちゃんのお母さんじゃない？」指差されたほうを見やると、なんとそこには母の姿が。「もう一度聴きたくて、来ちゃった」と、はにかんで笑っていた。そんな母の姿を見て、泣きそうになっってしまった。わざわざ船に乗って見に来てくれたことがとても嬉しかった。けれど何か言おうと涙が出そうで、「わざわざ来なくても良かったのに」なんて言ってしまった。「お母さん、これ見つけたよ。取っておいてくれたんだね。あのときは言えなかったけれど、来てくれてありがとう。」一瞬驚いた顔になった。その後すぐに、あの日と同じ、はにかんだ笑顔の母の姿がそこにはあった。

「佳作」

空から届いたエール

菅 花穂（愛媛県）

今から二年前、私は愛媛大学の「地域づくり」を学ぶゼミに入った。「色々な地域に足を運んで実践的に生きる力を学びたい！」そんな思いからゼミを選択した。因みにこのゼミは、活動量の多さ故に「ブラックゼミ」と学生の間で囁かれていたりもする。ゼミの先生は佐藤先生。目ヂカラがちよっぴり強い。「問題意識は何?」「何でそう思うの?」と私たちに鋭いツッコミを入れてくる。最初は答えられないことも多かった。人の意見に肯定ばかりしていたら「なるほどって言うの禁止ね!」と言われたこともある。私がゼミに入ってから一年後、先生がガンになった。ゼミが続けられなくなった。「本当に悔しいです。ゼミは変わってしまったかもしれないませんが、私の中ではずっとみなさんがゼミ生です。」と、先生からメッセージが送られてきた。そういえば、先生は飴と鞭の使い方がうまい。普段は厳しめの指導だが、大事な時にはしれっと励ましや褒めの言葉をくれる。

先生が入院してから八期ある歴代のゼミ生が一致団結

し、アルバム・色紙・動画を作って先生に届けた。其々が手紙も書いた。私はそこに「地域づくりを学ぶこのゼミに入って夢ができました。公務員になってその夢を叶えます。」と書いた。

その手紙を届けてから二ヶ月後、先生は帰らぬ人となった。公務員試験の一週間前だった。つらい現実だったが、「先生に手紙で誓ったからには今頑張らない」と思って耐えた。試験本番、緊張でいっぱいだったが、先生が応援してくれているような気がして強気の自分であることができた。

そして今日、八月十九日は合格発表の日。自分の番号を見つけた。青空に向かって笑顔で先生に報告しておいた。就職活動の時、私の心の中に先生が現れて支えてくれたように、今度は私が誰かを支えて周りに笑顔の花を咲かせます。先生、ありがとう。このゼミで学んだこと、一生忘れません。

「佳作」

押入れの中のうさぎ

松坂 敬子（神奈川県）

娘が自閉症と診断されたのが3才の時だった。その時の私は受け入れられず、いなくなってくれればいいのにと思っていた。ひどい親だが、それが当時の気持ちだった。

自閉症児と親の会に出席した時のこと。娘と同じ歳のA君が骨折していた。押入れから落ちたらしい。娘に同じことが起ったら……。最初に思ったのは「面倒くさい」だった。慣れない場所が苦手で、病院なんてパニックで大騒ぎ。「こんな子診察できないよ」とはつきり言われたこともある。わが子が骨折したら、「痛くてかわいそう」よりも、まず自分が大変になると心配した。ダメ親である。

数日後、娘が押入れで遊びだした。「押入れ↓落下↓骨折↓病院↓大変」という連想が頭の中をめぐり、「何やってんの、早く出なさい。」

と 急いで押入れをのぞいた。中にいる娘は白い布団の中からひよっこりと顔をだし、びっくりした顔をしていた。雪山のうさぎのようで、笑ってしまった。

「おいで。」

と、両手を広げるとにこっと笑い胸に飛び込んできた。こんなに笑顔がかわいかったのか。目は三日月の形になり、鼻も口も小さい。肌は白く髪はふわふわ。かわいい。この日から娘がかわいくてしかたがなくなつた。どうしてだろう。娘の笑顔が増えたからかもしれない。

夫が押入れに鍵をつけてくれた。それで解決だ。自閉症児を育てるということは、問題が起きたら一つ一つ解決していく。その積み重ねのような気がする。解決してくれた夫に娘の笑顔がかわいくてたまらないと伝えると

「それは敬子が笑っているからだよ。」

と言った。自閉症というフィルター越しに娘を見ていた。その顔は暗かったに違いない。私が笑えば娘も笑う。押入れの中のうさぎはそれを気づかせてくれた。私はいつも笑っていいようと思う。娘の笑顔はとびきりかわいいのだから。

「佳作」

一本のかさ

山口 舞（滋賀県）

私がまだ幼くて、弟は歩けないくらいに小さかった頃。私は、家族で奈良公園に出かけた。気持ちの良い日だったような記憶がある。父に手を握られて、母は弟を抱っこしている。それはいつもの家族の形だったし、心地の良いものだった。

さて、そろそろ帰ろうかという時間にさしかかった。さっきまでは大丈夫だったはずの天気が崩れ始めた。そうなったら、あとは速いもので。あつという間に大粒の雨が、私達の上に降ってきた。父は私を雨からかばい、母は弟をかばう。私は何もできずに父に守られ、弟はただ母に守られていた。

その時、私たちのすぐ横に一台の車が停まった。窓がウィーンと音をたてて開いた。

「これ、使って下さい！」
大学生くらいの女の子の人が、一本のビニル傘を私たちに渡した。父は

「でも…。」

としぶった様子。しかしお姉さんは笑顔で

「いいんです！小さい子もいるし、使って下さい！」
「ありがとうございます！」

父とお姉さんのやりとりを、じつと隣で聞いていた。その時は何が起こっていたのかよく分からずに。

見知らぬお姉さん、二度と会えないだろうお姉さんがくれた一本のビニル傘は、私達四人の家族をすっぽりと守ってくれた。

そんなことがあった、と、父や母は私に語ってくれた。何度も何度も、雨の日に。

私は今、常に車の中にビニル傘を一本用意している。いつか、あの時のお姉さんの様に私も誰かをあたたかく包めたのなら…。そして、その少しの気持ちで誰かを笑顔にできるのなら。あの時にもらった優しさと笑顔を、どこかの誰かに返せるように。

「佳作」

リストアート

秋田 真奈美（兵庫県）

お父さんは、いつも私に厳しかった。靴を揃えていないとよく怒鳴られた。

良い成績をとっても、褒めてくれることはなかったし、風邪を引いても学校を休む事は許してくれなかった。

誕生日はケーキや豪華な食事はなかった。

だけど、毎年私の勉強机にプレゼントが置いてあった。

毎日規則正しい時間に起こされた。

必ず6時30分、掛け布団を剥がされ食卓のイスに座らされる。

食べたくない朝食も「早く食べなさい」と半ば無理矢理口に入れられた。

だから、私は父が大嫌いだった。

学校でクラスメイトの友達から、シヨッピングでお父さんに、おもちゃを買ってもらったと聞いた時は、良い子を演じても何の成果もないことに落胆した。

4年生を迎えた頃、父は私に干渉しなくなっていた。

朝起きるのも自分の自由で、朝食も自分のペースで食べた。

学校行事にも父は参加しなくなっていた。

4年生の運動会の日、私は初めて寝坊をしてしまった。

集合時間は9時で運動会は10時からだったが、時計の針は10時を指していた。

目を涙でいっぱいしながら、遅刻をしたことがなかった私は「もう間に合わんから休む」と父に言った。

ほとんど私に干渉しなくなっていたが、

「あほか、行くんや！」と怒鳴った。

そして家から追い出されてしまった私は、家の近くの木の下で蹲って泣いていた。

学校にも行けず、家に帰ることも出来なかった。

「何しとんのや。」上を向くと父が立っていた。「無理や、行けへん」と私は泣きじゃくった。

「一緒に行つたるから行くで」と父は私の前を歩いていく。

「まってえや」私は必死で父の腕を掴み歩いた。

私は父の腕に手を添えながら、赤いバージンロードをゆっくり歩いている。幼い頃、父と向かった学校の道中を思い出しながら。

「なんや、また泣いとうわ」

父は私にそう言うと、涙ぐみながら微笑んだ。

「佳作」

三か月に一度

中村 実千代（栃木県）

目の前に、椅子に座りじつと動かない夫の背中が見える。夫の向こうには、ベッドに横たわる痩せ細ったAさんの姿。夫は、さつきから一言も発しない。「何か話しかければいいのに」と、私は気をもんでいた。

会社経営者のAさんと夫は知り合つてすぐに意気投合し、付き合いは、もう、三十年以上になる。四年前、Aさんは会長職に退いてまもなく大事故を起こし、全身不随となった。

夫は三か月に一度、定期的に見舞いに行く。初めは、県北の温泉病院へ二時間かけて通った。半年前に県央に転院できたので、「もつとまめに行こうよ」と言ったが、夫はかたくなに「三か月に一度」を守り通す。

私も必ず一緒に付いて行く。夫はAさんの奥さんに、「くっつき虫のようなものですから」と言っているが、私は、六年前、夫が検査入院をしたとき、ただ一人見舞いに来てくれたAさんの優しい心が忘れられない。

待合室のソファにぼつんと座っていたらAさんがやっ

てきて、「奥さん、たいへんだな。体に気を付けなさいよ」としみじみと言ってくれた。私は遠ざかるAさんの背中に、何度も首を垂れた。

夫が「じゃあな、また来るぞ」と言つてAさんに手を伸ばした。Aさんが夫の手を握り返し口をパクパクさせて、その手を上下に何度も振つた。

車に乗ると、夫はしばらく動かない。

「話しかけないのは、Aが話せないからさ。かえつて気を遣わせるだろう」

「握つた手を何度も振っていたね」

「ああ、『ありがとう』って言っていたんだよ」

「次は八月ね。Aさん、待っているわよ」

「いつまでも、待っていてもらうのさ」

夫の声が震えているように聞こえたのは、気のせいだろうか。私は、ハンドルを握る夫の左手に、右手をそつと重ねた。

「佳作」

感動の還暦バースデー

中静 憲夫（新潟県）

これから綴るのは、38年に及んだ小学校勤務の中で、最高に感動した日の出来事です。

「校長先生は子どもの頃、どう呼ばれていましたか」。4時間目が終わる直前、5年生の女の子がたった1人で校長室に聞きに来た。

「そう言えば、ノリオだから、ノコちゃんと呼ばれていなあ」と、私。

給食の時間になったので、全校児童30人の待つ食堂へ行った。そして一口食べた瞬間、突然「ハッピーバースデー、ディア、ノコちゃん」の大合唱が起こった。驚いて顔を上げると、食堂の壁には直径が1mもある三段重ねのケーキのタペストリーが……。

数10本のろうそくやイチゴの絵と一緒に、『校長先生、60歳おめでとうございます』、『校長先生、ありがとう』、『全校のみんなより』の文字も見えた。

次第に私の目はウルウル。巨大なケーキも涙でかすんで

きた。

翌5月3日の憲法記念日は、私の60回目の誕生日。全校児童がそろって私の誕生日と還暦を祝ってくれたのだ。あのバースデーの歌は、「ディア、校長先生」では歌いにくいと、「ノコちゃん」にしたことにも気付いた。

ビッグケーキのタペストリーは、5・6年生全員で図工の時間に作ってくれたとか。この背後には、担任教師のやさしい心遣いがあったに違いない。

私は日本一の幸せ校長。定年退職までの日々を、本校児童のために全力を尽くそうと固く誓ったものである。

ちなみに、私の勤務する学校は、平成16年10月23日に発生した新潟県中越地震の震源地近くにあり、児童は震度7を体験していた。

恐怖や不便な避難生活に耐え、全国からの温かい支援に接しながら、感謝の気持ちや人を思いやる優しい心を大きく育んでいった子どもたち。そのことが私には、ビッグケーキ同様、無性にうれしかった。

広告

未来へ。
咲く、
きずな、

地域に根ざす、
信用金庫として、
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。



愛媛信用金庫

広告

住友グループ

住友金属鉱山株式会社別子事業所
住友重機械工業株式会社愛媛製造所
住友林業株式会社新居浜事業所

住友化学株式会社愛媛工場
住友共同電力株式会社
三井住友建設株式会社四国支店

広告



安心と信頼の絆を
未来へ。

くらしの保障、相談するなら

 **JA共済**

●ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。
どなたでもご相談いただけます。

■JA共済ホームページアドレス <https://www.ja-kyosai.or.jp>

19481050114

広告

世界中の人々へ やさしい未来をつむぐ

地球環境への貢献

私たち大王製紙グループは、
地球環境と調和したグローバルな事業展開を通じて
環境問題に積極的に取り組み、
持続可能な社会の実現を目指します。

- グループで使用するエネルギーの約50%を、廃棄物を燃料としたバイオマスエネルギーに転換
- ボイラーの燃料を石炭や重油の化石燃料から、木くず・紙くず・廃プラスチック固形燃料(RPF)、
廃タイヤなどのバイオマス燃料に転換することでCO₂を削減

バイオマスエネルギー比率 約 **50%**



「エピソード部門」高校生以下の部

映画

佐伯 篤典（愛媛県 高校生）

僕は映画が好きだ。特に一人で劇場へ行き、何も買わずにただ観るのが好きだ。たまに友人と行きもするが、隣で話しかけてくる度に一人で行けなかったことを後悔する。そんな孤高の映画好きである僕が母と一緒に観に行ったのは、実に五年ぶり、小学校以来のことだった。

母も映画が好きだ。独身だった時はよく一人で観に行っていたらしいが、結婚してからはあまり行っていないそうだ。多分、合理主義で映画を時間のムダだと思っている父の影響だろう。そんな母を何を思っただか、僕はある日映画にさそった。

「どうしてさそったのか。」前日の夜にふと考えてみた。僕ももう高校生だ。一般的に男子高校生がお母さんと映画を観に行くというのが、ゼロではないにしろありえないことだという認識はあった。それでも母をさそった。どうしてか。その答えが出たのは、映画を観た後だった。

映画鑑賞後、入場時と同様に「周りのみんなは、この年で母親と映画を観にくるなんて、信じられないと思っっているよな」という自意識に包まれながら映画館を出て、車の助手席に座った。結局答えは出なかったなと思った。疲れて座席のシートを後ろへ倒して寝ようとした時、母から「またさそってね」と微笑みまじりに言われた。

これが答えだと感じた。この日のことを忘れないと思ったから。周りにどう思われるかなんて関係なしに、高校生になって照れくさくてできなかった、「母を笑顔にする」という重大な任務を、やっとできたと思っただから。

「もうコリゴリだよ。」喜びや恥じらいを抑えながら喋るには、それが精一杯だった。

「特別賞」

本当の「愛」

弓岡 夏鈴（愛媛県 高校生）

「自分は他の人とは違う」そんな感情を抱いた経験はありますか。私は、生みの親の顔を知りません。「捨てられた」と気付いた時には、児童施設にいました。

三歳の時、里親に出会いました。病弱だった私は、夜中に高熱を出すことが多かったのですが、目覚めると優しい養父母の顔がそばにあり、安心したのを覚えています。遠足にはおいしいお弁当を作ってくれました。修学旅行の準備の時もかわいい洋服を一緒に買いに行ってくれました。勉強が分からなければ教えてくれ、私が悪いことをして学校に呼ばれれば、仕事を休んででも来てくれました。高校三年生になった今では、愛情たっぷりに育てられてきたのだと実感しています。

しかし、このような穏やかな気持ちで養父母のことを語れるようになるには、時間がかかりました。小学校時代、「親と全然顔が似てないね」

と友人に何気なく言われた言葉でひどく傷付きました。公文書を取ると親と名字が違うので、友人に気付かれるのが嫌で隠していました。そんなこともあり、理由もなく無視したり、反抗したり、困らせるばかりの時期もありました。「本当の親じゃないけん」自分が一番傷付けられた言葉を平気で言ってしまったこともありました。そんな時、二人は悲しそうな表情で黙って私の顔を見ていました。中学生の頃、友達関係で悩んで学校に行きたくないと言った時、「一人じゃないけん、私らがおる」と言って泣きながら私を抱きしめてくれたのを思い出します。

私は、現在警察官を志望しています。少年課で働き、私のような境遇の子の保護や非行に走った子の更生に関わることで社会に役立ちたいです。里親に育てられたからといって同情されたくはありません。むしろ、本当の親以上に愛情を注ぎ、懸命に育ててくれているこの養父母に出会えて良かった、この幸運をチャンスに変えて今度は恩返しをしたいとは思っています。

「優秀賞」

ぎちぎち弁当

黒光 優陽（愛媛県 高校生）

中学校三年生三月、私はその日を迎えた。個人的には勉強してきたつもりだ。不確かな自信と共に志望校である南高校に足を踏み入れた。

一月の頃だ。中学校三年生の冬休みを終え、勉強がとび抜けてできるわけではない私は、受験勉強づくめの毎日をおこなっていた。十二月の数学のテストで半分の点数を二回連続でとれなかったこともあり、次は六割をとろうと意気込んでいたのだ。しかし現実は厳しかった。五十二点という結果で先生には南高校は五分五分だ。違う高校を考えた方が良いと言われ続ける結果となってしまった。母は大丈夫だ、南高で良い、の一点張りですうだねと同意することしかできなかったが、正直とても不安だった。そのときのどうしようもない不安感は今でも覚えている。

冷たい風が吹いた。外は小雨が降っているようだ。覚悟は決めている。後悔なんかするもんかと喝を入れ、テストの問題用紙に向かった。会場は緊張に満ちている。余計私に不安が募った。午前中のテストが終わり、テストの出来

を気にしながらも昼食の時間を迎えた。弁当箱を開けて母が作ったぎちぎちにつまった弁当に目をやる。安心しつつも食べ進めていると、小さな紙が下に隠れていることに気づいた。「午後からもがんばれ。」そこには控えめな母らしい、気遣いが施された手紙が入っていたのだ。目頭が熱くなった。母は私のことを全部分かっていたのだ。特別受験について言及はしてこなかったが、ずっと心配してくれて、誰よりも応援してくれていたのだろう。勇気をもらえたような気がした。

目新しく、さわやかな風が吹く南高で、今日も母のぎちぎち弁当を食べる。これは愛情だよ、悪戯っぽく笑う母を思い出して笑みがこぼれる。あと二年後もまたこの弁当に感謝するのだろうか。「お母さん。いつもありがとう。」口うるさいけれど、私は母が大好きだ。曇った空に晴れ間が見えた気がした。

「優秀賞」

七夕の願い事

三好 陽花里（愛媛県 高校生）

一年前の七夕、私は何を願っただろう。あまりよく覚えていない。

外は茶色く濁った海、二階に逃げ込む私の耳に聞こえるのは、鳴り響く放送と一階から聞こえる自由に動く家具がぶつかる奇妙な重い音。何が起きているかよく分からなかった。

西日本豪雨。それは私の身に起こった初めての災害だった。途絶えた通信と襲いかかる恐怖の中、母と一夜を過ごした。どうか命だけは、と。

目を覚まし、生きていることに安心したのもつかの間、異様な匂いがするのに気が付いた。恐る恐る一階に行ってみる。目に映ったのは、私が知っている自分の家ではなかった。

何も感じない、何も考えない。一日中ただひたすら、ゴミとなった思い出の物を外に放り出す作業をした。手を止めてしまえば涙をこぼしてしまいそうだった。

作業中、私は一つのローファーを見つけた。私が高校生

になって、たったの三ヶ月。まだ一度も履いたことのない私のローファーだった。誰かの役に立つために生まれてきたのに、何も果たすことなく使えなくなった。それを見ながら私は、私達人間にも有り得ることだと思った。もしかしたら私は今日、死んでいたかもしれない。誰かのために何かをしたんだ、と胸をはることもできずに、このローファーと同じようになっただけかもしれない。私は今までの十六年間の生き方を後悔した。

災害があつてから、たくさんの人に支えられた。支援物資を届けてくれたり、家にまで来てくれた、先生、部員、友達がいた。だから私は、この災害を不幸なこととは思わない。みんながいて私がいる。人の温かさを感じた大きな出来事だった。人のために生きたいと思った。

今年の七夕、私は「人のために生きて、恩返しをしたい」と願った。

「優秀賞」

五人のおばさん

橋本 美衣菜（愛媛県 高校生）

私は十七歳にして、もう五人の甥っ子のおばさんである。一番上は小学生の男の子。小学生を侮るなかれ。口が達者で、私の事をケツデカおばなどと言ってくる。私はまだ高校生でお肌もつるつるだ。お尻は少し大きくてもおばさんではない。そう言われた時は、こちょこちょ攻撃をして、お姉さんと言いつつ直させるようにしている。しかし、このやりとりも案外楽しかったりもする。それを見た下の子も、まぜてほしいのか、おばばと言ってくる。五人も相手をするのは疲れる。

こう見えて、実は子どもが苦手だったりする。何故好かれるのか分からないが、隠れても見つかって遊びに付き合わされる。姉からは、「いつもありがとね、助かってる。」と言われるので、「子どもたちの相手も悪くない。」とたまに思うこともある。

先日は、子どもたちを連れ公園に遊びに行った。そこで鬼ごっこをしたり、隠れんぼをしたりして遊んだ。その時は、私も小学生時代にかえったつもりで遊んだ。五人で始

めた鬼ごっこ。夢中だったので、子どもが何人か増えていたことに後になって気づいたのが印象的だった。帰りの車で皆疲れきって、五人並んで仲良く寝ていたと言われ、思わずふふつと笑みがこぼれた。そして、なんだかんだ言つて、私は本当はこの子どもたちが大好きなんだと思った。これからも、子どもたちの笑顔を見るために、たくさん遊んで思い出を作っていきたい。そして、私も子どもたちのように、周りの人に笑顔を届けたい。

「入選」

お年玉

佐久間 大空（愛媛県 高校生）

私のひいばあちゃんの家は祖父、祖母の家よりも近く、三歳の頃の私でも歩いていける距離にあった。そのためか物心ついた頃の記憶はひいばあちゃんといるときのことが多い。家を訪ねるといつもアイスクリームを食べさせてくれていた。ひいばあちゃん自身はそこまで甘い物が好きではなく食べないのでアイスクリームは冷凍焼けをしていた。食べるときのヒリツとした感覚は今でもはっきり覚えている。

ひいばあちゃんと春、夏、秋、冬を過ごす中で田植えや稲刈り、畑仕事の手伝いをしていた。だがその中で確実に老いはきていた。八十五歳を超えての農作業はとても過酷で重労働なので農家を営んでいる伯父に仕事を手伝って貰うことが多くなっていた。それでも自分自らが田んぼに真っ先に出て朝早くから作業をするという熱心な姿勢に変わりはなかった。しかし、私が小学校五年、米の収穫も終わった頃の十月中旬、ひいばあちゃんは入院してしまい、二ヵ月後の十二月中旬に天国へ旅立った。九十一歳だった。

親族が悲しみに暮れる中、遺品整理をしていくと幾つかの封筒が見つかった。中を開けてみると、そこには親族一人一人への感謝の思いが綴られた手紙が入っていた。

「きつとこの手紙を読んでいるときにはばあちゃんはお空に行っているでしょう。小さい頃からよく訪ねてきてくれたとても嬉しかった。楽しかった。本当にありがとう。そういうえば、そろそろお正月だね。よいお年を。」

こういった内容が書かれていた。そしてその封筒の中からお年玉が出てきた。後日聞いた話だとひいばあちゃんは三年前から余命宣告をされていたそうだ。だが普通に接していてそのような雰囲気は一切なかった。

あの時の手紙とお年玉はあえてひいばあちゃんの家に残してある。そのせいだろうか、訪れるとアイスクリームを出してくれそうな気がしてならない。

「入選」

俺の最優秀賞

正木 悠登（愛媛県 高校生）

「こんなはずではなかった。」これは僕が、中学校一年生の合唱コンクールのときの話です。当時の僕の担任の先生は、体育の先生で、体育大会で優勝したこともあり、熱が入っていました。二冠を取ろうと僕たちも必死に練習をして、最優秀賞を取れるのではないかという自信をもつくらい練習をしました。

そして迎えた当日に、ステージへ上がり歌い始めると、元気な声が売りなのに小さかったり、声とピアノがずれてしまいました。初めての合唱コンクールということもあり、緊張が出てしまったのだと思います。歌い終わると、クラス全員が落ち込んでしまっていました。結果は、もちろん最優秀賞はとれず、他の賞にすら、手が届きませんでした。その後、教室に戻ると、先生は、僕たちをなぐさめず、驚くことを言いました。

「お前たちならもっと良いのができる。もう一度並べ。」と、言い椅子を後ろに並ばせました。そして、歌い始めました。すると、今まで聴き慣れた電子キーボードの音、お

互いを励まし合い、チームワークを高めた、見慣れた教室の風景などのおかげもあってか緊張から解き放たれました。歌声が教室中を響き渡り、まちがいはなく一番良いものとなりました。歌いながら泣く人も少なくありませんでした。このときに僕は初めて感動というものを知りました。その時僕は、本番で良いものができても、感動するわけではなく、人と人との心が重なり、響き合うことによっては、感動は生まれるのだと思いました。歌い終わったときのみんなの顔は、快晴のようでした。

翌日、学校へ行くと、体育大会優勝の賞状の隣に、「俺の最優秀賞」という賞状が、新しく貼ってありました。もし先生の一言がなければ、苦い思い出になっていたと思います。

「入選」

届け、私の声。

原田 海妃（愛媛県 高校生）

私の将来の夢は声優です。小学生の頃から今も変わりません。親にはもちろん「現実を見なさい」「あんたには向いてない」と反対されました。小学生の私はそんな親を酷いと思っていました。

声優になろうと思ったきっかけは、あるアニメでした。そのアニメの主人公が言った台詞と声優の演技は私の心を揺らしました。

当時クラスでいじめられていた私は、人に対して臆病になっていました。ですがそのアニメを見て、人を傷つける声が勇気を与える声に変わるのだと知り、私もいつか勇気を与える声を届けたいと思いました。それから私はいじめに対して「やめて」と言えるようになりました。いじめはなくなりませんでした。私の心は随分と軽くなりました。それから声優になる為、努力を始めました。小学校から高校で、ダンス、放送、演劇部に入り、日々の発声練習や家での自主練習に励みました。仲間と意見がぶつかりながらも、努力が報われ、賞を頂きました。親に成果を報告し

ても、反対の意は変わらないままでした。

このままでは駄目だと高校二年の私は、あることを決めました。自分で脚本を創り演者として舞台に立つ姿を親に見てもらおうと。実際に頑張る姿を見れば何か変わると思いました。「一度でいい」と決して舞台を見ないと言っていた親に何度も頼み、本番前日、「行く」と言われました。そして迎えた本番。届け、私の声。そう願いながら、演技に精一杯の想いを込めました。家に帰って感想を聞くと「よかった」の一言でした。

後日、友人から話を聞き、驚きました。私の親が舞台を見て号泣していたそうです。本当かと母に聞くと、「あたりまえでしょ、娘が頑張ってるんだから」と言い、私はあふれそうな涙をぐっとこらえ、その日は何時間も私の想いを伝えました。今では背中を押し、応援してくれる両親に感謝でいっぱいです。

「入選」

父の背中

小屋敷 愛里（愛媛県 高校生）

「悩み事ばかり言って食事がまずいやろ。」

予想もしない父の言葉に私は悲しくなり、食事の途中ながら席を立つと、部屋に戻りました。確かに私は夕食時、部活や友人関係の悩みなどを毎日のように話していました。たとえ解決できない事でも、話を聞いてもらうだけで気持ちが楽になっていたのです。

その日から私は父を避けるようになりました。そんな日々が三ヶ月程続いたある日の事です。

「パパはあの日、あなたにきつい事を言ったって、すごく後悔してるよ。もう会話もできなくなって、これからパパはあなたに背中を見てもらうって………涙ぐんでたよ。」母の話を聞き、私は何も言えなくなりました。同時に私は父の事を、あまりにも知らない事に気付いたので。

父は最近、地域の行事に積極的に参加している事は知っていました。どんな事をしているのか、私には興味すら無かったです。父が交通指導に出かけた朝、私は小学校近くの交差点に行ってみました。そこには信号待ちをする

小学生達の前で、制服に身を包み、背筋をスツと伸ばしている父の姿がありました。やがて信号が青に変わると、

「気をつけて、行ってらっしゃい。」と声をかけています。人や車がたくさん行き交う交差点で、てきぱきと行動する父の姿はとても頼もしく見え私は父にこの活動をいつまでも続けてほしいと思いました。家に帰り学校へ行く用意を済ませた時、父が帰って来ました。私は鞆を持ち部屋を出て玄関へ向かいます。

「パパ、おはよう。」父は突然話しかけてきた私に驚き目を丸くしていましたが、

「ああ、おはよう。」と挨拶を返してくれました。私は靴をはくと、父に向き合い、

「いつも、ありがとう。行って来ます。」

「気を付けてね。行ってらっしゃい。」その時父は、これまで見せた事が無い程の笑顔になり、私を見送ってくれたのです。

私達に再び笑顔と会話が戻った瞬間でした。

「入選」

忘れられない愛顔

神谷 日和（愛媛県 高校生）

初めてのことだった。誰かの笑顔を見て、心が晴れるのを感じたのは。一年経った今でも、あの愛顔が忘れられない。

『呈茶のご案内』という文字と、形が少し変なヒマワリのイラスト。数日前に私が作った貼り紙が入り口のドアに貼ってある。…こんなことで、被災された方々を笑顔にできるのだろうか？机に並べた棗や茶碗を見て、少し不安になった。「西日本豪雨災害で被災されて、避難を余儀なくされている方々の所へ行ってお茶をお出しすることになったよ。」と顧問の先生から聞いたときは『私も、被災された方々の役に立てるんだ！』と喜んだが、いざお点前を始めようとする『迷惑』という言葉が頭に浮かんだ。

不安な気持ちが無くならないままお点前を始めたせいか、これまでのどんなお茶会よりも緊張した。『みなさんが、早くもとの生活に戻れますように…。』と願いを込めて、丁寧にお茶をたてた。正客の女性がお茶を飲んで、「おいしい…！」と呟いたのが聞こえたとき、嬉しくて思わず

机の下で小さくガッツポーズをした。

私が「仕舞わせていただきます。」と一礼したときに、お茶を飲み終わった女性が「ありがとう、本当においしかったです。」と言ってニコツと笑った。彼女の心からの言葉と愛顔に、『ああ、ちゃんと笑顔にできた。私も役に立たんのだ。』と心が晴れるのを感じた。

いつも「あなたはお点前が遅すぎる！」と先生に注意されてしまうけど、今日くらいは先生も許してくれるはずだ。今日はいつものよりゆっくり、ゆっくりしよう。みなさんがお菓子の写真を撮ったり、お話したりしている、愛顔でいっぱいこの穏やかな時間が、少しでも長く続くように。



太陽石油株式会社

四国事業所
愛媛県今治市菊間町種 4070-2
TEL 0898-54-2500 (代)
http://www.taiyooil.net/



この街に、あってよかった。

好きになれるスーパーってなんだろう？
私たちはその答えに向かって、たくさんの試みを始めます。
まじめに、たのしく、あたらしく。笑顔や便利や
ワクワクする体験をたくさん生み出していく、フジへ。
この街に、あってよかったと、
たくさんの人に言ってもらえるように。
これからのフジに、ご期待ください。



【本部】松山市宮西一丁目2番1号

感動を、けずりだそう。



盛り付け例：ソフトけずり



鹿児島県枕崎製造のプレミアムなかつお枯節を使用。
「おいしさ1.5倍^{*}」の琥珀色が特長です。 ^{*}当社一般品比

「プレ節」25ミクロン
花けずり



259袋

「プレ節」25ミクロン
ソフトけずり



209袋



1.5g×12袋

好評
発売中

【本社】〒799-3192 愛媛県伊予市米湊1696番地 TEL. (089)982-1151

マルトモ <http://www.marutomo.co.jp>

愛媛新聞をご購読されていない方をご紹介ください！

愛媛新聞 読者紹介 キャンペーン

愛媛新聞の新規購読者(6カ月以上ご購読)を
ご紹介いただいた方に

3,000円分 をプレゼント

JCB
商品券

ご紹介対象者と
お申し込み条件

愛媛県内にお住まいの6カ月以上
ご購読いただける方が対象です。

愛媛新聞をご購読中の方、ご購読予約中の方、購読中で住所変更される方、最近6カ月以内に購読中止された方、紹介者ご本人、紹介者と同一世帯のご家族(※別世帯は対象)は対象外です。申し込みに重複があった場合は、最初の申し込みを優先させていただきます。



パソコンやスマートフォンからご紹介！

愛媛新聞 www.ehime-np.co.jp



※お申し込み条件や商品券の金額など、予告なく変更する場合がございます。あらかじめ下記までお問い合わせください。

詳しくは) 愛媛新聞社 地域読者局 販売部 ☎089-935-2306(平日 午前9時~午後5時) または 最寄りの愛媛新聞エリアサービスまでお問い合わせください

「写真部門」

知事賞

祭りがはじまるよ

大野 賀代子(愛媛県)

待ちに待った年に一回のお祭りを
楽しんでいる笑顔を見てこちらも
笑顔になりました。



白川義員特別賞

夏休み万歳!

鈴木 文代(和歌山県)

ママの実家に帰省して、青空のもと
親子でジャンプしました。
夏休み万歳!



河原学園賞

また来ようね

水落 洋行(広島県)

休日、家族で釣りをし、一日遊んだ
あとの兄弟の姿。二人の満たされた
表情が微笑ましかった。



優秀賞

放課後のひと時

来代 あかり(東京都)

こういった高校時代のひと時が懐かしく
思える写真はいつまでも宝です。



優秀賞

笑いあって、 寄り添いあって。

近藤 史門(愛知県)

祖母の誕生日にケーキを買ってきた
祖父。慣れないことするんじゃないよ
と言う祖母の顔は幸せそうでした。

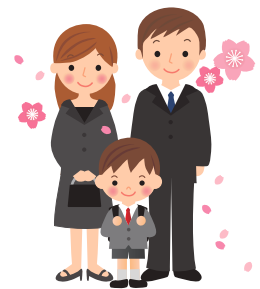


優秀賞

待ちに待った いちねんせい!

阿蘇品 祐子(熊本県)

入学式を翌日に控え、おともだちを
作るのが待ち遠しく嬉しさ爆発でした。



入選



スマイル戦隊

佐々木 陽介(東京都)

撮影のために前方へ走るとそれについて来た子ども達。後ろの大人含め全員満面の笑顔になった瞬間です。

パパ大好き!

福田 滯奈(愛媛県)

パパと一緒に撮った娘の写真です。笑顔がそっくり!



さいこうのプレゼント

山崎 唯(熊本県)

ばあばの定年退職の日、こっそり花束を持って行ってみた。…なんだ!ぼくからのチュウが1番嬉しそう!



入選



蜻蛉帽子

鈴木 俊樹(埼玉県)

息子が懸命に捕らえようとしても
素早く逃げるトンボ。ふと気付いたら
帽子にとまっていてニッコリ愛顔に!

花盛り。

中鉢 蒼(北海道)

いつでもどこでも誰に対しても
ステキな笑顔を見せてくれる後輩を、
一番好きな花だというひまわりと一緒に。



小・中・高校生の部（小学生未満含む）

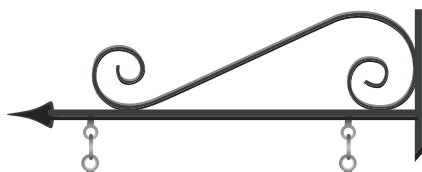


知事賞

笑顔の和音

松下 莉子(愛媛県 高校生)

西予市にある米博物館での1枚。
音符をイメージ。
実は、苦しい体勢での1枚です。
(ありがとう)

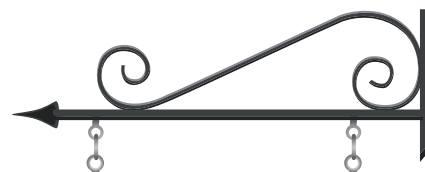


河原学園賞

喜色満面

和田 奈々(愛媛県 高校生)

90歳のおじいちゃん、
笑い皺がいい感じ。



白川義員特別賞

相棒

國保 美帆(神奈川県 高校生)

ハトに餌やりをしていて、ハトが頭に
乗った時の和やかな愛顔です。

各賞



愛媛広告協会賞

小春日和

尾崎 あかね(愛媛県)

波止場で気持ち良さそうにゴロゴロ。

一般の部

愛媛県商工会議所連合会賞

認知なのに

三谷 真美(愛知県)

認知で介護施設にいたお婆ちゃん。私だけわかってくれたね。今年は三回忌。思い出ありがとう。



愛媛県獣医師会賞

温かいんだから

内藤 七摘(愛媛県 高校生)

この日は曇り空で寒く午後から雨が降る天気。そんな中、女性の優しさや、ワンちゃんの表情が何とも言えない。



小・中・高校生の部 (小学生未満含む)

愛媛県理容生活衛生同業組合賞

おいしいー

栗坂 侑愛(愛媛県 小学生)

毎日、毎日楽しみにしているのがこの給食です。今日も本当においしいな。



各 賞



愛媛県歯科医師会賞

ハッピースカイ

岩城 咲羽(愛媛県 高校生)

体育祭競技、二人三脚リレー。晴天の青空に、はちきれんばかりの二人の笑顔が印象的な1枚。

小・中・高校生の部
(小学生未満含む)

愛媛県情報サービス産業協議会賞

仲間との絆

小島 友梨香(神奈川県 高校生)

得点を入れて喜びを分かち合っているときの愛顔です。



愛媛県IT推進協会賞

にぱっ!な笑顔

佐伯 朱音(愛媛県 高校生)

素敵な笑顔です。楽しそうですね!



愛媛経済同友会賞

麦わらおじさん

渡辺 権菜(東京都 高校生)

茂原の七夕祭りで実行委員の方を撮影しました。
気さくな人柄に「麦わらおじさん」というタイトルをつけました。

審査委員紹介



新井 満 (審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。2005年、『この街で』(作詞・新井満、作曲・新井満、三宮麻由子)を制作。
2007年、『千の風になつて』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。
2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。
2018年、『石鎚山』を作詞・作曲。



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。俳人。明治大学・聖心女子大学講師。
松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ。
2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。
2019年、『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日』で第34回愛媛出版文化賞大賞を受賞。
同年、初エッセイ集『もう泣かない電気毛布は裏切らない』を刊行。
歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。



紺野 美沙子 (ゲスト審査委員)

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。
1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。
1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。
2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。



白川 義員 (特別審査委員)

1935年愛媛県四国中央市生まれ。ニッポン放送、フジテレビを経て、1962年フリー写真家。
1993年に南極大陸一周に成功(史上初)。
1996年から「世界百名山」撮影プロジェクトを開始、作品集「世界百名山」を出版。
2002年、国連が「国際山岳年」を記念して、作品集「世界百名山」の中から12作品を選んだ記念切手を発行。
記念切手12種類全点を1作家で制作したのはフェルメール、ダリ、ピカソなどに続いて世界で11人目、写真では初。
2012年11月、作品集「永遠の日本」発表。



中村 時広 (審査委員)

このほかにも、1981年、全米写真家協会最高写真家賞(史上10人目)を受賞するなど世界を代表する写真家。
1972年、第13回毎日芸術賞 1972年、芸術選奨文部大臣賞
1988年、第36回菊池寛賞 1995年、第27回日本芸術大賞
※上記日本を代表する芸術4賞総てを受賞したのは、文学、美術、音楽等総ての表現分野を通して白川義員ただ一人。
1993年衆議院議員。
1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。
2010年愛媛県知事。2018年3選、現在3期目。
1960年愛媛県松山市生まれ。
1982年三菱商事株式会社入社。
1987年愛媛県議会議員。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる循環型社会の実現をめざし、
地域の皆様の豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA 周桑

JA 松山市

JA にしうわ

JA 新居浜市

JA おちいまばり

JA えひめ中央

JA ひがしうわ

JA 愛媛県信連

JA 西条

JA 今治立花

JA 愛媛たいき

JA えひめ南



JAバンク えひめ
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内12JAと県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛^え顔^{がお}感動ものがたり
「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

令和二年二月発行

発行 愛媛県

スポーツ・文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

■平成30年度 一般の部 知事賞

「あんまり似てないな」幾原 正智



■平成30年度 高校生以下の部 知事賞

「願い事」松浦 佑美



「エピソード」部門の知事賞（平成28年度までは知事賞・特別賞）受賞作品については、水樹奈々さんの朗読にオリジナルアニメーション等を合わせた動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索 

